

さらばわが友

1 最初の出会い

①かけ出しの頃、わたしは外資系法律事務所の東京事務所に勤めた。日本人弁護士 10 数名のその当時としては大きな事務所だった。

入所した初日、わたしは先輩弁護士の部屋に挨拶に行った。

新人の弁護士は 3 人。それぞれ別々にアメリカ人、ドイツ人、日本人のパートナー弁護士の個室を回って挨拶をすることになった。

②アメリカ人とドイツ人の弁護士にそれぞれ挨拶し、わたしはロンドンから派遣されていたルード氏の部屋を訪れた。イギリス人弁護士は、伝統的で、堅苦しく、お高くとまっているイメージがあったが、彼は全く違った。個室のドアは半開きで、中からクラシック音楽を口ずさむ声が聞こえてきた。

③わたしを部屋に招き入れ、彼はフォートナム・メイソンの紅茶を入れながら、当時話題になっているテレフンケン特許（PAL 方式のカラーテレビに関する特許）の話を振ってきた。新入りの値踏みをするには手ごろな話題だったかもしれない。

英語力を試されるとばかり構えていたわたしは、拍子抜けがした。わたしはかつて企業の特許部にいたし、後に社会人入学した大学でも、特許法のマスター論文を書いていた。特許の話なら、お手のものだった。

④特許の話が一段落したので、聞いてみた。

さっき口ずさんでいたのは、ベートーベンのバイオリン協奏曲ですか？

いやいや違う。バッハのブランデンブルグ協奏曲の 1 節さ。

⑤それをきっかけに、話題は一転した。

わたしはオペラが大好きなんだが、君の趣味は何だ？

最も好きなのは詩で、20 代には詩人になるのが夢でした。

なればよかったのに。

いやいや詩人では食べていけませんよ。

⑥われわれはすぐ打ち解け、バートランド・ラッセル(1872年-1970年。英国の哲学者・数学者)の『幸福論』を話し合った。ラッセルは楽観論者か悲観論者か？ 他愛のない話だったが、わたしの仲間でこんな話に乗ってくる者は今までいなかった。

⑦われわれには音楽と読書という共通の趣味があり、好きな作曲家や作家の傾向も似ていた。

こんな感じで、約束した時間はとうにすぎ40分ほど経ってしまった。わたしは時間が気になったが、ルード氏は気にする風もない。

顔見世の挨拶のはずだったのに、多忙な外国人パートナーが、新入りとの話に長い時間を取ってくれたのは大変な好意だった。

⑧別れ際に彼はいった。

君をマサと呼ぶから、わたしを（ファーストネームの）ピアスと呼んでくれ。

彼は続けた。

You are not like a Japanese（君はふつうの日本人と違う）。

それは、自分の意見がはっきりしている、わたしへの誉め言葉だったらしい。

2 精神の地平線を広げる

①わたしは、ピアスとたちまち仲良くなった。大柄で、陽気で、オペラを口ずさみながら廊下を闊歩する弁護士には、規格外の面白さがあった。

3か月後に帰国するとき、ピアスは「2年もしたら、ロンドンの事務所で働かないか」と誘ってくれた。だが、当時わたしは「国際法務ビジネスの研修はアメリカで」と考えていたので、真剣に受け取らなかった。

②その後、わたしは弁護士業を学ぶのに精いっぱいだったし、さらには1年以上も続く沖縄の労働争議を任され、ピアスのことは忘れてしまった。

ピアスは、しかし、ロンドンからよく連絡をくれた。

年に数回来日したときは、2人で六本木の赤ちょうちんに行った。話題はだいたい決まって

いた。人生をいかに生きるか。ビジネスと人生の折り合いをどうつけるか？
われわれはバートランド・ラッセル、カール・ヒルティ、モンテーニュなどの、モラリスト（人生探求家）について語りあった。

③ピアスから旧約聖書の『伝道の書』を知った。伝道者コヘレトは、人間ははかなく、この世は空しいと嘆いた。

空の空、空の空、一切は空である。

人は、一生、暗闇と、悲しみと、多くの悩みと、痛みと病と、憤りの中にあるのだ。

知恵が多ければ悩みが深く、知識を増す者は憂いを増す。

わたしは、この世に生きているのがつくづく嫌になった。

④人生は空しく、現実世界は不条理で、死は避けることができない。まるで諸行無常の世界ではないか。

たしかに生きるのはしんどいが、それだけでは厭世主義に堕ちてしまう。空しさを見極める
とき、生きるのはかなり楽になるのではないか？

ピアスの話についていくために、仕事の合間を見つけて、わたしは猛然と仏教を読みあさった。

⑤こうしてわたしは、法華経にある教えに至った。

常懷悲感 心遂醒悟。

これは「悲しみの感情を心に抱いて見つめ続け、それを乗り越えたときに大きな生きる力に目覚めることができる」ほどの意味らしい。

早速わたしは次の飲み会で、ピアスと無常の超え方について話し合った。

3 わたしのロンドン時代

①3年後、彼はわたしをロンドンの事務所に招いてくれた。

ロンドン郊外のピアスの家に10日ほどホームステイして、アパートを探し、口座開設、ロンドン市内の見学など、彼はつきっきりで面倒を見てくれた（この時の思い出は第10回『わが青春のウインブルドン』参照）。

弁護士は朝から晩まで忙しいと相場が決まっているのに、彼はスタッフに任せず、自ら案内し、助言してくれた。

自分が逆の立場に立った時、外国からの研修生に対し、とてもそこまで面倒見ることはできない。ピアスの好意には、いま思い出しても頭が下がる。

②ロンドンでの1年間の実務研修中、われわれは交友を更に深めた。彼はどこでもわたしを引き立ててくれた。

彼は欧米のビジネスマンに顔が広がったが、日本の話になるとかならず *Masa is not like a Japanese* とわたしを引き立ててくれた。そういう噂をいろいろな人から聞いた。

③わたしはまだ若輩のアソシエイトだったにもかかわらず、ピアスのおかげで数多くの人と知り合うことができた。

ユダヤ系の大富豪や南アフリカのビジネスマンと一緒に仕事をし、イギリスの弁護士、政治家、貴族、新聞記者、劇場支配人、声楽家を知る機会を得た。

ピアスに誘われて、在英日本大使館でのパーティーに、金魚のフンのようにくっついていった（フラグメンツ第8回1④以下参照）。

④彼の交際の広さは群を抜いていた。彼には「お堅い弁護士」のイメージは全くなく、陽気なビジネスマンに見えた。知らず知らず、わたしは貴重な体験を積んでいった。

⑤ピアスはわたしより10歳年長だったが、不思議とウマがあった。わたしが彼のことを「わたしのボスだ」と友人に紹介すると、彼は真剣な顔をしていうのだった。

マサ！ オレとお前は友達だ。オレはお前のボスじゃあない…。

こんなやりとりが何度か繰り返され、やがてわれわれは、職制も国籍も年齢を超えて親しい友になった。

4 ハッピー・リタイアメント

①イギリスから帰国して2年も経たずに、わたしは東京事務所を辞めた。

わたしは日本企業の東京本社、ピアスはその英国子会社対し、2人で共同して法務サービスを提供する。ピアスにはそんな期待があったろう。

そう考えると気が重かったが、辞表を出す前に事前にピアスに連絡した。

②彼の返事は、意外にもあっさりしたものだった。

おめでとう。自前の事務所の経営は大変だろうが、やりがいもあるだろう。

マサの成功を祈る。東京に出張したときは、今までとおりに飲みにいこう。

③独立して、東京事務所との付き合いはその後一切切れてしまった。日本では同じ組織である限りの人間関係に過ぎない。組織をやめればよその人である。

ところがピアスは違った。その後も陰に陽にわたしを助けてくれた。

イギリス企業や南アのビジネスマンの仕事を紹介してくれた。ドクター・ベッカーを紹介してくれたのもピアスだった(第7回「フレディ・ジラルデにて」参照)。

④だが数年後、今度はわたしがピアスに驚かされることになる。55歳の時、なんと彼は弁護士を辞めて、引退してしまった。

世界最大級の法律事務所のシニアパートナーである。健康を害したわけでもなく、仕事に行き詰まったわけでもない。むしろ、働き盛りである。陽気で、屈託のない人柄はクライアントの受けもよく、数多くの日本のクライアントを持つ外、大手日本企業の英国子会社の役員もやっていた。

まるで「人生を投げ出したのか」と疑われるような引退だった。

⑤彼が引退した理由に、思い当たる節がないわけではない。ピアスは生来争い事が嫌いで、温和な性格だった。

だが、弁護士の仕事は紛争の解決だから、相手方とどうしても対立する。その対立は苛烈で、時に感情的な敵対関係に発展する。南アを脱出するためやむを得ない手段だったとはいえ、彼にとって弁護士業は充足感のない、ストレスが多い職業だったろう。

⑥引退してからは、ピアスが来日することもなくなった。

わたしといえば、働き盛りの40代で、所員20余名の事務所を切り盛りするのに、四苦八苦だった。

しだいにピアスとの間も疎遠になり、年に1度のクリスマスカードの交換だけになってしまった。

新著をだしたときはその旨報告したが、彼からは決まって「マサの本を読みたいもんだ。日本語が読めるといいんだが、残念だ」と返事が返ってきた。

要するに、何の知らせもないのが、よい知らせだった。

⑦その後 10 数年が過ぎた。わたしも還暦となり、ピアスを見習って引退生活を夢見て、事務所の経営を後輩に任せた。しかし、柱を失った事務所は多事多端で、一時ダッチロール状態に陥いる。

こうして、わたしのハッピー・リタイアメントは水泡と帰した。今更だが、人生は本当に思うようにならない。

5 心に悲感を抱いて

①ピアスとわたしは、なぜウマがあっただろう。

陽気な言動にもかかわらず、彼が内奥に悲感を抱えているのをわたしは感じていた。彼は彼で、わたしにニヒリズム(虚無主義)の影を感じたのではないか。

心の中に悲感を抱えて生きる者同士の共通点のようなものを、なんとなく感じ取ったのだ。まさに「語らざれば憂いなきに似たり」である。

②ピアスの悲しみは、おそらくユダヤ系の出自にあるのだろう。

彼の先祖はヨーロッパで暮らしていたが、ナチスのユダヤ人の迫害が迫り、オランダに逃れた。さらに、そこも危険が迫り、南アに逃れた。

③彼の 20 代のころ、南アは人種隔離政策を強化し、人種差別法を次々と制定した。南アは警察国家的様相を呈した。白人とはいえ、迫害された歴史を持つユダヤ人にとっては、ひと事ではなかったろう（南アについては、第 11 回～13 回の『南アフリカ素描』参照）。

④青年ピアスは、南アの将来に見切りをつけ、英連邦の盟主だったイギリスに渡り、弁護士資格を得たらしい。

彼が南ア時代の話をするのはほとんどなかったが、若き日の体験は、彼の考えに決定的な影響を与えたようである。

6 さらばピアス

①今年の春も浅い日。

前日は夜更かして寝坊してしまった。起きがけにメールをチェックした途端、短いメールが目にとまった。ピアスの奥さんからだった。

I am sad to tell you that Pearce died early on Friday morning of a heart attack..

②たちまち目が覚め、妻に告げるため1階へかけ降りた。

ピアスが…。

思わず涙ぐみ、後は言葉にならなかった。自分でも思いがけない反応だった。父母の死にもわたしは涙したことなど、一度もなかったのに。

妻はすぐにわたしの異変に気付いた。

亡くなったのね…。

③振り返った見れば、ピアスとの出会いは、わたしの生き方を大きく変えた。

彼との会話がきっかけで、わたしはユダヤ人の凄まじい現実主義に興味を持ち、『タルムード』などの解説書を読み漁った。

タルムードはユダヤ教の律法の解釈を集大成したもので、ビジネス、法律、歴史、道徳、愛、幸福などすべてを含んでいる。その根底にあるのは、「自己愛」を中核にした徹底した現世哲学である。日本流の建前や精神論とは、似ても似つかない思考方式だった。

④ピアスと出会ってから10年後、『ユダヤ式交渉術』を出版することができた。これはピアスから学んだ知見に加え、実際にユダヤ人ビジネスマンを代理した経験を加味した交渉本である（当時のベストセラーになり、現在も文庫本で発売中）。

さらに2年後、念願だった人生論『良い人生を生きる智慧』を出版できた（本ブログに全文掲載）。

⑤こうしてわたしは、弁護士業と著作業の二足のわらじを履き始めた。

やがて、思索と著作は、単なる趣味の域を超えて、わたしの生きがいとなった。

物事を深く考え、それを叙述し、発表する。これほど一心不乱になれる作業は外にない。

⑥青年時代の詩人の夢は叶わなかったが、何とか夢の周辺で生きていくことができた。

それもこれも、ピアスのおかげである。

最初の日あの幸運な出会いがなかったら、わたしたちは永遠に交差する事はなかった。

彼こそはわたしの本性を最もよく理解した友人だったのだ。

⑦ピアスはいま土に帰った。彼の放った光芒も、やがて消え失せる。わたしも遠からずから土に帰る。もはや二人の友情を知る者はいない。空の空、空の空、一切は空である。

だが、それも宇宙にとっては当たり前風景に過ぎない。嘆くには及ばない。

さらばピアス。唯一無二のわが友。